令和7年度　学校評価表（最終）

三原市立大和小学校（校番20）

a 学校教育目標	夢や目標に向かって，自ら伸びる　ともに伸びる児童の育成 （校訓）　自ら伸びる　ともに伸びる	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】 志を抱き，その実現に向けて考え，行動できる未来の創り手の育成 【ビジョン】　児童，教職員，保護者が「夢や目標に向かって，自ら伸びる　ともに伸びる」という教育風土がある学校 ＜めざす学校像＞　「自ら伸びる　ともに伸びる」という教育風土のある学校 ＜めざす子供像＞　「規律あるかかわり合いを通して，自ら考えともに伸びようとする子供」 ＜めざす教職員像＞　「児童を守り，育て，育む」ことを自覚し，実践できる教職員

評価計画					自己評価								改善方策	学校関係者			
													n	l 評価			m
c 中期経営目標	d 短期目標	e目標達成のための具体的方策（大枠）	f 評価項目	指標	令和7年2月 h 達成値（参考）	目標値	10月 h 達成値	2月 h 達成値	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析		改善方策	イ	ロ	ハ	コメント
確かな学力 主体的な学びを実現する取組を通し学力の定着と主体的・対話的で深い学びを追究する	【授業改善による学力定着】 その学年で身に付けるべき学力を確実に定着させる	各学年で身に付けるとともに，親和性の高い集団をつくる ・児童の主体的な学びにつながる「問い」「学び合い」のある授業づくり【研究部】 ・45分間の授業で，R80を活用した「振り返り」から逆算した「めあて」を設定した「わかる、できる」授業づくり ・学び方の選択肢と自己決定のある授業づくり【研究部】 ・「聞く」ことを大切にし，ねらいを達成するための「学び合い（ペアやグループによる学習）」のある授業づくり【研究部】 ・教科書の文章を「読む」ことができる授業づくり【研究部】 ・教材文等のことばに根拠を求める授業づくり【研究部】 ・学習規律の徹底し，親和性のある学習集団づくり【研究部】【生徒指導部】 ・ねらいを達成するために，ICT機器等を活用した授業づくり【研究部】 ・実生活や実社会の課題を解決するプロジェクト型学習の充実【教務部】	単元末テスト（国語，算数，社会，理科）の学年平均値が指標に示す点を超える教科数（20教科）【評価時期】（1学期末・2学期末）	平均値 1・2年生（90点） 3・4年生（85点） 5・6年生（80点）	20/20教科（100%）	20／20教科	75%	17/20教科 85%	68%	C	・単元テストは、3年生の理科と4年生の国語・算数の平均値が指標を下回った。4年生は目標値を下回った教科が4教科から2教科に減少した。 ・図検定は、全学年が目標値を上回った。 ・i-checkの学習意欲は、1学年が全国平均を上回った。 ・教職員のアンケート結果は、ほぼ目標値に達している。		・「たしかめプリント」などを使い、毎時間の学習内容の定着を見取り、必要に応じて個別指導を行っていく。 ・「わかる」「できた」と感じられる授業をつくり、児童の学習意欲の向上を図る。 ・標準学力調査で課題のあった内容の学び直しや練習を朝のドリルタイムで行い、当該学年で学ぶべき内容を確実に身に付けさせて次の学年に進級できるようにする。	○			・授業方法が工夫されている。 ・課題に対して、自分の意見を交流する場面や疑問を解決する場面で、児童が様々な意見を聞くために移動して学べる環境がよいと感じた。 ・来年度入学してくる1年生に現1年生が、小学校ではどんな学習をするのかオリエンテーションしている授業をみた。人に説明するには、自分がよく理解していないとできないので、学習の定着が深まると感じた。 ・どの先生方も、授業を工夫されて、子どもたちが主体的に学べるように努力されていた。
			標準学力調査の平均値が全国平均以上の教科数（13教科）【評価時期 】（1月）	全国平均以上の教科数	2/13教科（15%）	13／13教科		7/13教科 54%									
			校内図検定（自作テスト）の平均正答率【評価時期 】（10月）	各学年の平均正答率80%以上	6/6学年（100%）	100%	83%	100%									
			i－check学習環境分析の「学習意欲」【評価時期 】（5月　10月）	全学年全校平均以上	4学年（74%）	6学年	2学年 33%	1学年 16%									
			○教職員アンケートによる調査 ・学習者が目的意識を持つことができるような「問い」であるか。 ・学習者がR80を活用した学びのゴール（何がどのようにできればよいのか）を意識できるような工夫があるか。 ・学習者が新たな意味やアイデアを伝え合えるような対話の場面を設定しているか。 ・学習者が知識、経験、見方、考え方を生かしながら学べる計画になっているか。 ・学習者が自身の成長や課題に気付けるような工夫があるか。 ・児童から引き出したい学びの姿を明確にして、「問い」を構成したか。 【評価時期】（1学期末・2学期末）	6項目肯定的評価の平均割合	95%（105%）	95%	86%	86%									
豊かな心と親和性の高い集団 安心して学べる学習環境の基盤となる規範意識の醸成を図るとともに，自他を尊重する心情・態度を育成する	【規範意識の育成】 児童に所属意識を持たせ，円滑な集団生活の基盤となる（規範意識・ルール・マナー等）を身に付けさせる	・「大和小みんなの一日」，学習規律チェック表に基づく積極的な生徒指導を日常的に実施【生徒指導部】 ・生活や学習の場で自己決定する場の設定【生徒指導部】【研究部】	i－check「学級の絆」【評価時期 】（5月　10月）	学級の絆の項目で全国平均以上に位置づく児童の割合60%以上の学級数	6/6学級	6/6学級	50%	80%	87%	B	・学級の絆の項目で全国平均以上に位置づく児童が60%以上の学級は5/6であった。 ・学習規律の定着に向けて、夏季休業中に職員研修を行い、全学級で「すなおな聞き方」に取り組むことの共通認識をもった。「すなおな聞き方」は、「すこやか」「なるほど」「いいね」等温かい反応になっているので、相手を受容する姿勢が生まれている。 ・不登校傾向の児童は、昼や給食のみSSRで過ごしその他は自教室で過ごしたり、自分が決めた時間に登校して保健室で過ごしたり、市ふれあい教室に参加したりしている。また、発達特性等で自教室での授業へ参加しにくい児童については、管理職や専科等で別室指導や補教指導を行うこともしており、全ての児童に学びの場がある。 ・発表参観日では、不安が強い児童は事前に本人の思いを聞き、その思いに寄り添った結果、本番に参加できた。 ・なかよし集会等、児童からの発案で実施できた集会があった。 ・児童質問紙では、7項目中1項目の「地域のことが好きです。」で目標値に達した。総合的な学習等で地域に関する学習を行った成果であると考える。また、「自分のよさを周りの人に認められていると思う」「困ったことがあったとき、先生や友だちに相談できる」は目標値との差が大きい。「学校のきまりやルールを守って生活している。」は、6学年中3学年が肯定的評価100%であり、規範意識は育っていると言える。 ・月に一度のいじめ防止委員会、定期的（年3回）なアンケートと面談により、いじめ事案やいじめにつながる事案の把握を行っている。また、連絡帳や本人の申し出があった場合についても会め、いじめ事案やいじめにつながる事案があった時には、臨時のいじめ防止委員会を行い、管理職・生徒指導担当・担任で指導方針等を確認してから指導にあたることができた。また、事案発生後は3か月は全職員で加害・被害児童の様子を共有している。	・引き続き、本人や保護者の思いに寄り添いながら、全ての児童に学びの場を提供していく。 ・今後も、なかよし班遊び等の異学年交流、児童会活動の充実などを通して、自己肯定感や自己有用感が高まるようにしていく。 ・いじめにつながる事案を早期に見つけることができるよう、気になる児童については全職員で見守ることができるように情報を共有する場をもつようにする。 ・学活でSSTを取り入れるなど、対人関係スキルを伸ばしていくことができるように工夫していくこと等を今後検討する必要がある。	○			・児童の特性に応じて、多様な学びの場所があることで、子供が安心して学習に取り組める。 ・児童一人一人の個性を把握し、それに合わせた、かかわりや指導を考えて実践されていることが分かった。
	【共感的な人間関係づくり】 児童に，他者とかかわり合う場面を与え，その中で，自己肯定感を高めさせるとともに，相手を大切にする心と態度を身に付けさせる	・全ての児童に，学校内（学校外も含めて）に「学ぶの場」がある取組【生徒指導部】 ・全ての児童が，困った時に学校の中に相談できる人や場がある取組【生徒指導部】 ・「聞く」ことや「学び合い」を大切にした授業改善【研究部】【生徒指導部】 ・ねらいをもった児童同士の交流の場がある学級活動【生徒指導部】	児童質問紙によるアンケート調査 （あ）「学校のきまりやルールを守って生活をしている」		98%	98%	90%	94%									
			（い）「自分にはよいところがある」		88%	90%	79%	83%									
			（う）「自分のよさを周りの人に認められていると思う」		79%	90%	77%	76%									
			（え）「将来の夢や目標を持っています」		89%	95%	89%	90%									
			（お）「努力すれば，自分もたいていのことは出来ると思います」		90%	95%	90%	85%									
			（か）「地域のことが好きです」		90%	90%	90%	92%									
			（き）「困ったことがあったとき，先生や友だちに相談できる」【評価時期】（1学期末・2学期末）		81%	100%	72%	68%									
			いじめ事案やいじめにつながる事案を把握し，児童と保護者、学級の児童に対応する。		100%	100%	100%	100%									
健やかな体 生涯にわたって健康を保持増進し，豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する	【生涯にわたって健康づくりをしようとする健康教育の充実】 【生涯にわたって運動しようとする心情の育成につながる授業改善】 児童に確かな目標を持たせ，生涯にわたって健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現しようとする心と体を育成させる	・生活リズムを整える取組の実施（園小中連携教育）【保健安全部】 ・楽しく，運動量がある体育科の授業改善【保健安全部】 ・自分の目標に向かって挑戦することができる体育科等の授業改善【保健安全部】 ・児童同士が「見る」ことを大切にした体育科の授業改善【保健安全部】 ・自己決定の場がある体育科の授業改善【研究部】【保健安全部】	児童質問紙よりアンケートによる調査 「体育の授業は楽しい」 「おうちで決めた時刻に寝ている。」 【評価時期】（1学期末・2学期末）	肯定的評価の割合	「体育の授業」89% 「早寝」70%	「体育の授業」95% 「早寝」80%	「体育の授業」92% 「早寝」64%	「体育の授業」90% 「早寝」57%	73%	C	・「体育の授業が楽しい」と感じている児童は、目標値に達していない。また、昨年度よりも数値は高いが、1学期よりも低くなっている。多くの児童が体育の授業を楽しいと感じているが、体を動かすことが嫌い、技能面でできないことに不安や苦手感を感じる児童もいる。各単元ごとに、主運動につながる導入運動を行ったり、ルールの簡易化をしたりする等、スモールステップで運動が苦手な児童が取り組める工夫をしている必要があると考える。 ・「おうちで決めた時刻に寝ている」（早寝）ことができている児童は、目標値に達していない。早寝が難しい要因としては、様々な家庭環境や、ゲームやスマートフォン等、メディアの視聴時間が長いことが考えられる。	・楽しく、運動量がある体育の授業づくりを推進していくため、夏季休業中に研修したことを生かしながら、授業で実践していく。また、職員間で情報共有を行う。 ・学び舎う場・振り返る場・視覚的に分かりやすく提示する場などで、引き続きICTを活用していく。 ・自己決定や自己選択の場を設定し、自分の目標に向かって楽しく学習できるように工夫していく。また、実態に合わせて、スモールステップで運動に取り組めるように工夫する。（ボールゲーム等でコースを選択したり、鉄棒や跳び箱等で技のコースを選択・決定したりする場を設定する等） ・3学期に2回目の「生活アンケート」を実施し、寝る1時間前のアウトメディアの取り組みと、早寝への啓発を行う。	○			・早寝に課題があることがわかる。低学年以外は、早寝に課題があり、高学年は学校から帰宅後、仮眠をとる児童がいるとのこと。こども園、小中で毎年実施している生活習慣を見直す取組を今後も継続し、各家庭が生活のサイクルを見直す機会をつくるきっかけとしてほしい。 ・アウトメディアへの取組は、子どもが携帯電話使用して連絡を取り合う等、1家庭だけでは取り組めないこともあるので家庭間の協力連携を視野に入れて今後取り組んで行く必要がある。
働き方改革 教育課題に適切に対応する学校体制を再構築するとともに，学校行事及び総合的な学習の時間の内容を精選することを通して，児童に向き合う時間数を確保するとともに，職員の健康を維持する。		教育課題に適切に対応する学校体制を再構築するとともに，行事等の精選をし，児童に向き合う時間を確保する。 ・行事等の内容を精選し，行事に係る練習時間数を減少する。 ・総合的な学習の時間の内容を精選する。 ・各部が担当する行事を精選する。 ・関係機関・団体と連携する取組について，学校が担う業務を軽減する。 ・定時退校を実現する。 ・見通しを持った業務を行う。	○市の方針「勤務時間上限の目安時間[上限の目安時間及び特例的な扱い]」に記載されている内容を達成する。 ・上限目安時間・45時間/月を超えない。・360時間/年を超えない。 ・特例的な扱い・720時間/年を超えない。・45時間/月を超える月は，1年間に6月まで。・連続する複数月のそれぞれの期間について，1カ月当たりの平均が80時間を超えない。 【評価時期】（9月末・1月末）	勤務時間外の在校時間　全教職員年間360時間以内，月45時間以内の割合	47%	100%	73%	81%	81%	B	・昨年同時期に比べると、時間外在校等時間は減っている。（児童が登校している月とは違う、1月に初めて全職員45時間以内） ・授業の進捗や行事等を考慮しながら、授業時間数を調整し、児童の下校時刻を決めていくことで、職員の研修時間や授業準備等、子どもと向き合う時間の確保ができた。 ・研修や行事は、早めに全体に周知、共有することで、全体のスケジュール管理と個人のスケジュール管理が効率よく行えるようになってきた。	・今後も、年間を通した授業計画や行事計画をする。授業準備や校務分掌業務は長期休業中を活用し、早めの構想を練り、時期が近づいたら再考するようにする。 ・引き続き、行事に関しては、教育効果を考えながら精選していき、教育目標達成と照らし合わせながら考えていく。 ・管理職も含めて、時間が在校等時間が市の方針を達成できるように、個人のタイムマネジメント能力を高めるとともに、SSSの更なる活用等を図っていく。また、相手意識を持った業務遂行を心掛けることで、お互いの時間を有効活用していく組織風土を醸成する。	○			・知り合いで、学校現場ではないが食事をとる時間もなく働いている状況があると聞いたが、体を蝕んでまで働く必要があるか、社会全体で考えていかなければならにと思う。 ・限られた時間や人の中で最大限の教育効果をあげるために先生方は日々努力されていると思う。

研究　主体的に学び，自ら伸び　ともに伸びようとする児童の育成
～「問いの工夫」がある授業づくり～

連携教育　園・小・中連携教育で伸びる「大和っ子」の育成

【自己評価　評価】
A：100≦（目標達成）　B：80≦（ほぼ達成）＜100
C：60≦（もう少し）＜80　D：（できていない）＜60

イ：自己評価は適正である。
ロ：自己評価は適正でない。
ハ：分からない。